様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１４５３８

研究課題名（和文）「農と食の地域自給圏」に関する農村社会開発手法の研究－「最も美しい村」の日仏比較

研究課題名（英文）Comparative Research on the way of rural planning of the Most Beautiful Villages between France and Japan

研究代表者
藤本　穣彦（FUJIMOTO, TOKIHIKO）

明治大学・政治経済学部・専任准教授

研究者番号：９０５５５５７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1982年にフランスで始まった「最も美しい村」運動に着目し、日仏の比較研究を行った。「最も美しい村」運動の農村社会開発は、地域や文化遺産の品質管理を行いながら、村全体をブランド化し、コミュニティ・ビジネスを展開することであった。「最も美しい村」のブランディングやコミュニティビジネスの対象であり、まだ評価指標にはなっていないが、「農と食をローカルにつなぐ」という視点がある。「テロワール」という概念に代表される「農と食の自給圏」という視点は審査基準に反映されていない。これを、「最も美しい村」の農村社会開発手法としていかに構築し、指標化できるかを研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
フランスと日本の農村計画策定における「美の基準」について、「最も美しい村（the most beautiful villages)」を事例に比較研究を行った。その結果、フランスでは歴史景観を「生活景観（Living Heritage）」として評価し、その集合表現である集落を守るべき地域単位として設定していることが明らかになった。これに対して日本では、若者の参加、景観の保全、再生可能エネルギー導入、美食革命、ツーリズム促進、移住促進といった多様な側面を個別に評価して足し合わせた総合評価を行っている。小さな村の経済的な自立を目指す方向性を共有しつつも、その「美の基準」（何を守るか）は異なる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a comparative research between Japan and France, focusing on the "Most Beautiful Villages" that began in France in 1982. The "Most Beautiful Villages" movement's approach to rural social development was to brand entire villages and develop community businesses, with quality control of the local and cultural heritage.
One of the subjects of the "Most Beautiful Villages" branding and community business, but not yet an evaluation index, was the viewpoint of "linking agriculture and food locally. As represented by the concept of "terroir," The perspective of "agricultural and food self-sufficiency zones" is not currently reflected in the criteria for judging.
Against the above background, the leading questions of this study were summarized as follows. How can the practices that have been oriented toward "regional self-sufficiency zones for agriculture and food," be realized as a rural community development method for "the most beautiful village"?

研究分野：社会学

キーワード：最も美しい村　農と食の自給圏　農村計画　資源計画　農村文化　日本　フランス　農食

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

本研究では，1982 年にフランスではじまった「最も美しい村」運動を研究の対象として，日本とフランスの比較社会研究を行う。「最も美しい村」運動の農村社会開発手法は，村内の地域・文化遺産の品質管理を核に，村全体をブランディングしてコミュニティビジネスを興すもので，町村長がリーダーとなり，住民参加（住民の日常的な実践と世代継承，若者の参加）で進める村づくりである。各村々は，「最も美しい村」の資格委員によって審査・格付けされる。その手法は世界各地で採用されており，ベルギー，イタリア，日本，スペイン，そしてフランスを正加盟国とした世界連合が立ち上がり，年に一度世界総会が開かれている。

「最も美しい村」のブランド化やコミュニティビジネスの主題となっているものの，評価指標化に至っていないものが，「農と食をローカルにつなぐ」という視点である。今日，フランスはヨーロッパでも比較的農産物の地域自給・地産地消が実践されている国となっている。例えば，2000 年代初頭よりフランス版の産消提携である AMAP がスタートし，その数は 2,000 件に達している。「テロワール」の概念に代表されるように，食の郷土性と地域性を重視する文化が形成され，フランスの最も美しい村の重要な地域資源となっている。日本でも、「日本で最も美しい村」の設立者の一人である松尾雅彦（元カルビー株式会社社長）が，『スマート・テロワール』（2014 年，学芸出版社）で，「農と食の地域自給圏」（松尾は特に地域経済自給圏を重視）をいかに実現するかを問うている。しかし「農と食の自給圏」の視点は，現在のところ，フランスでも日本でも「最も美しい村」の審査・格付け基準に反映されていない。

以上を背景として、本研究の主導的な問いは次のようにまとめられる。「農と食の地域自給圏」を志向してきた「生産の場と消費の場の近接化」を求める実践を，いかにして「最も美しい村」の農村社会開発手法として実現できるか。そのための基本的考え方と評価指標をどのように設定できるか。

## ２．研究の目的

「農と食をローカルにつなぐ」という理念や，「農と食の地域自給圏」構築のための農村計画論については，近年，農業経営学や農と食の社会学，農村計画学を中心に，地産地消や産直システム（short food supply system），CSA（Community Supported Agriculture）に関する事例研究が行われ，その意義と可能性が提起されてきている。しかし，農村社会開発手法としての洗練化や地域政策，農村計画論への反映を企図した研究は今のところ十分に進んでいない。そこで，本研究では，「最も美しい村」の農村社会開発手法の日仏比較研究を通じて，「農と食」に関する感性的評価基準を抽出し，評価指標として構成することを目指す。

「最も美しい村」の農村社会開発手法としては，2012 年「世界で最も美しい村」連合の設立総会フォーラムを基に，Les Plus Beaux Villages de France（2013）“ Most Beautiful Villages：The French experience and other foreign developments ” が公刊された。加盟各国の組織運営や情報発信などの活動を概括することが出来るものの，各国の「最も美しい村」の評価基準やその哲学，「最も美しい村」の審査・格付けのプロセス，評価者の構成と専門性，評価視点，計画の基礎理論についての分析が十分になされているわけではない。日本をはじめ，各国は，フランスに学んで評価指標を構築し，採点シートを作成しているが，フランスの指標も随時更新されており，いつの時点のものをどのように採用したかによって基準と内容が異なる。まずは，「フランスで最も美しい村連合」の農村社会開発に関する基準と方法を解明することが課題となる。フランスの「最も美しい村」の加盟村は，基盤資料と審査委員の調査データ整理によって品質管理されており，事務局調査と審査会への資料準備過程への参与観察，審査会での討論や資格審査委員へのインタビューで解明することが，当面の研究目的となる。

## ３．研究の方法

研究計画書の提案当初，以下のような研究計画を立てた。

**1 年目**　「フランスで最も美しい村」の評価基準と農村社会構造を解明

「フランスで最も美しい村」連合事務局（クレルモン・フェラン）にて，審査・格付けの基盤資料設計，インデックス，データ整理のストックノウハウを現地調査する。審査会へ向けた準備作業（現地調査と資料作成）に参加し，審査会への参与観察と資格委員（町村長）へのインタビューを行う。

**2 年目**　日仏比較のための基準設定

「最も美しい村」の農村社会開発手法で明確な評価基準が与えられていない「農と食の自給圏」について，フランスの農食連携実践として CSA や AMAP を集中的に調査し，その位置づけを明確化する。そのうえで，「日本で最も美しい村」の審査・格付け基準における日仏比較研究の基準

を設定する。

**3年目　「農と食の自給圏」の観点から審査基準を再考し，評価指標案を開発**

日仏比較の成果をもとに，「農と食の自給圏」の視点から「最も美しい村」の農村社会開発手法を再検討し，国際基準での審査・評価が可能となる指標案を開発する。それをフランスと日本の「最も美しい村」連合にフィードバックし，実践的な評価指標として応用する。

研究計画の2年目途中まで順調に経過していたが，2020年2，3月の調査は新型コロナウイルス（Covid-19）のまん延のため海外調査を行うことができなかった。その後，3年目の2020年度以降も研究計画を延長してチャンスを伺っていたものの海外調査を行うことができなかった。また，コロナ渦の中で，日仏双方の現場で「最も美しい村」の審査活動やまちづくり活動，お祭りの開催等が制約されたことから，フィールドワークに基づく質的な研究を十分に蓄積することができなかった。そのため研究方法を見直し，資料収集の方法を再検討したうえで，資料・データの質的分析，オンライン・インタビューに切り替え，美の基準や感性的評価指標の構築を目的とするものへと更新していった。研究計画を延長して最終年度となった2022年度には，北海道・美瑛町や赤井川村，京極町，江差町，秋田県小坂町，青森県田子町等のフィールドワークを再開することができ，研究成果をフィードバックすると共に，さらなるコメントを得て研究を深化させることができた。

## ４．研究成果

フランスの「最も美しい村」では，12，13世紀頃の，中世の景観を守ることが１つの大きな基準であり，国によって公的に指定された遺産の保護を核として，その村の街並みの調和と統一感を守っている。

フランスの「最も美しい村」が注目する12,13世紀というのは，フランスの農村の原型が中世農業革命を経て出来上がる時期であり，並行して，封建領主の支配する都市が分散して成立する時期でもあった。

この時期に建設・再建された城砦や城壁，教会は，フランスの歴史遺産に登録されている。それらを中心とする地域的まとまり＝「村(Village)」を，フランスの「最も美しい村」は守っている。Succession（継続・継承）。

その際の評価基準は，「集落が宝石，環境は宝石（集落）を引き立たせる額縁」であり，農的な景観や農業の状態は，「フランスの最も美しい村」の審査・評価の対象とはならない。

フランスで「最も美しい村」の資格審査委員，パスカル・ベルナルドの次の言葉が，その考え方を代表しているので引用しておきたい。

「フランスで最も美しい村」の審査・格付け評価基準

| | | |
|---|---|---|
| 1. 遺産の状況 | | 1. 保護状況 |
| ＞コミューンの質 | 街並み | 2. 村の周辺部の美しさ |
| | | 3. 街並みの広がり |
| | | 4. 街並みの統一感 |
| | | 5. 道路の多様性 |
| | 建物 | 6. 規模 |
| | | 7. 屋根に使用された材料と統一感 |
| | | 8. ファサードに使用された材料と統一感 |
| | | 9. 小規模地域遺産(2つ) |
| 2. 開発と監視 | 開発計画方針 | 10. 都市(農村)計画の存在 |
| | 美的処置 | 11. 電線・電話線 |
| | | 12. 公共空間 |
| | | 13. 建築 |
| | 開発 | 14. 照明 |
| | | 15. 植栽 |
| | 監視 | 16. 巡回 |
| | | 17. 駐在 |
| 3. 地図や書籍 | Album Les Plus Beaux Villages de France　ほか9冊(計10項目) | |

集落＝bijou/宝石，自然＝écran/額縁

Les Plus Beaux Villages de France®

「最も美しい村」は，特別な歴史景観が形づくる非常に優れている村である。それは博物館ではない。品質管理なくして村の発展はない。品質に対して緊張感をもっていないと，すぐに景観にノイズが入り込んでくる。「最も美しい村」をつくっているという，住民の生活そのものが遺産なのであり（Living Heritage），品質のマネジメントに終わりはない。審美的で本質的な美しさが保たれ，感性的なインパクトが高い村であろうとすること，それが「最も美しい村」に暮らしているということであり，「最も美しい村」を守っているということである。(Pascal Bernard)

これに対して，日本の「最も美しい村」では，若者の参加，景観保全，再生可能エネルギー導入，美食革命，ツーリズム・交流促進，移住促進という６つの評価軸があり，その考え方によっ

て審査指標が構築されている。とりわけ，経済的自立戦略を構成する，食・住・エネルギーの地域内自給，美味しい村(地域の美食革命)，ツーリズムを支える宿やレストラン，若者や女性の雇用や起業支援，地場産業の育成，これらの審査項目はすべて日本独自のものであり，フランスにはない評価項目となっている。

日本の「最も美しい村」連合設立者の松尾雅彦が，「最も美しい村運動の決め手はシェフ組織との連携であり，辺境の地にこそ一流のレストランを（ヌーベル・キュイジーヌ du テロワール)」というように，日本の「最も美しい村」の農業・農村景観は，その土地の豊かな食に支えられているとする考えが大事にされており，評価指標にも反映されている。松尾はこれを，「食とエネルギーの地域自給圏（スマート・テロワール)」をつくり，ネットワークすると表現していた。つまり，自然・生態環境に根ざした農業景観を守ることが，集落・村を守ることになるという考え方である。

また，首長のビジョン（30 年後の）と意志を問うのが日本の特徴である。それは，日本の「最も美しい村」連合が，平成の大合併の際に合併せず，単独自治体として「自立」する方途を選択した農村自治体のネットワークからなっているという特徴がある。

以上が研究成果の核心である。本研究の直接的な研究成果として以下を公刊することができた。研究計画時点及び研究開始時点では，想定していなかった研究の広がりとして，ドイツ・ザクセン州での調査，ネットワーキングや，ベトナム・メコンデルタの「新しい農村計画 New Rural village」との比較研究と接続することができた。コロナ渦となり，十分なフィールドワーク，比較研究とはならなかったが，次の研究課題としたい。また，NPO 法人「日本で最も美しい村」連合が開講するオンライン大学で本研究成果を披露しており，アーカイブで閲覧することができる。ご参照頂ければ幸いである。

○主たる研究成果

1.『まちづくりの思考力――暮らし方が変わればまちが変わる』(藤本穣彦, 実生社, 2022 年).

2.「最も美しい村運動――地域の自立を目指すコミュニティツーリズム」（山田泰司，中嶋紀世生，藤本穣彦)，『交流まちづくり――サステイナブルな地域をつくる新しい観光』国土総合研究機構観光まちづくり研究会編，学芸出版社，2022 年：第 7 章.

3.「フランス・日本・ベトナム（メコンデルタ）における「最も美しい村」の農村資源計画評価の比較研究」(藤本穣彦)，『東アジア研究』第 29 号：1-18 頁，2021 年，査読あり.

4.「ドイツ・ザクセン州の『最も美しい村』における地域再生への取り組み」（藤本穣彦)，『社会環境論究』第 13 号：47-72 頁，2021 年，査読あり.

5.「『最も美しい村』の農村計画論――審査の考え方の日仏比較」(藤本穣彦)，NPO 法人「日本で最も美しい村」連合オンライン大学，2022 年 8 月 19 日，青森県田子町.
https://www.youtube.com/watch?v=4STdUx8g5Y4

○研究の発展

本研究の成果をふまえて応募した研究課題「『暮らしの美学』を表現する景観デザイン：『日本で最も美しい村』の感性評価研究」（JSPS 科研費・基盤研究（C)，23K05289）が採択となった。次の研究では，日本国内の「最も美しい村」にフォーカスを絞って，実践的な調査研究を進めていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　7件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Alam Zafar、Watanabe Yoshinobu、Hanif Shazia、Sato Tatsuro、Fujimoto Tokihiko | ４．巻<br>14 |
| ２．論文標題<br>Social Enterprise in Small Hydropower (SHP) Owned by a Limited Liability Partnership (LLP) between a Food Cooperative and a Social Venture Company; a Case Study of the 20 kW Shiraito (Step3) SHP in Itoshima City, Fukuoka (Japan) | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Energies | ６．最初と最後の頁<br>6727～6727 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.3390/en14206727 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Alam Zafar、Watanabe Yoshinobu、Hanif Shazia、Sato Tatsuro、Fujimoto Tokihiko | ４．巻<br>14 |
| ２．論文標題<br>Community-Based Business on Small Hydropower (SHP) in Rural Japan: A Case Study on a Community Owned SHP Model of Ohito Agricultural Cooperative | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>Energies | ６．最初と最後の頁<br>3349～3349 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.3390/en14113349 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Huu Chiem Nguyen、Cong Thuan Nguyen、Duy Can Nguyen、Van Cong Nguyen、Sy Nam Tran、Duc Thanh Tran、Thi Diem Huynh、Shiratori Yusuke、Fujimoto Tokihiko | ４．巻<br>994 |
| ２．論文標題<br>Establishment of a model house of community-energy for sustainable agriculture. A case study of Tan Phu Thanh Village, Hau Giang Province in the Vietnamese Mekong Delta | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>IOP Conference Series: Earth and Environmental Science | ６．最初と最後の頁<br>012001～012001 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1088/1755-1315/994/1/012001 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤本穣彦 | ４．巻<br>59（2） |
| ２．論文標題<br>「自然への還元」に基づく廃棄系再生バイオマスの地域循環デザインーー鹿児島県日置市の食品・生ごみリサイクル堆肥化の事例 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>明治大学社会科学研究所紀要 | ６．最初と最後の頁<br>75-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>藤本穣彦 | 4．巻<br>29 |
| 2．論文標題<br>フランス・日本・ベトナム（メコンデルタ）における 「最も美しい村」の農村資源計画評価の比較研究――「世界単位」論（高谷好一）アプローチ | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>東アジア研究 | 6．最初と最後の頁<br>1-18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>藤本穣彦 | 4．巻<br>28（1） |
| 2．論文標題<br>メコンデルタの自然環境・土地利用の変容と水郷集落の再生を考える――持続可能な熱帯デルタ研究のための農村資源計画学アプローチ | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>東アジア研究 | 6．最初と最後の頁<br>137-153 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Tokihiko Fujimoto, Nguyen HuuChiem, Nguyen Van Cong, Nguyen Xuan Loc, Tran Sy Nam, Nguyen Cong Thuan, Nguyen Duy Can, Le Tran Thanh Liem, Ryuji Nakayama, Yusuke Shiratori | 4．巻<br>Paper ID: 53 |
| 2．論文標題<br>Restoration Channel and Waterfront Community by Effective Utilization of Local Biomass and Bio-waste Resources under the Concept of “the Most Beautiful Village in Japan”: A Case Study of Tan Phu Thanh Village, HauGiang Province in Mekong Delta, Vietnam | 5．発行年<br>2020年 |
| 3．雑誌名<br>Proceedings of Roorkee Water Conclave 2020 | 6．最初と最後の頁<br>1 - 9 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>Tokihiko Fujimoto and Kazuki Kagohashi | 4．巻<br>Vol.12 (Issue 6) |
| 2．論文標題<br>Community-Led Micro-Hydropower Development and Landcare: A Case Study of Networking Activities of Local Residents and Farmers in the Gokase Township (Japan) | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>Energies | 6．最初と最後の頁<br>1-9 (No.1033) |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.3390/en12061033 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>松原　英治 ・ 藤本　穣彦 | 4．巻<br>11 |
| 2．論文標題<br>地域内経済循環を促す地域通貨の参加と流通のデザイン――「オリオン」（北九州市折尾地区）の事例研究と電子地域通貨の展開 | 5．発行年<br>2019年 |
| 3．雑誌名<br>社会環境論究 | 6．最初と最後の頁<br>43-68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　6件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>Tokihiko Fujimoto |
| 2．発表標題<br>Community Design for the Most Beautiful Village in Mekong Delta |
| 3．学会等名<br>Seminar on Climate Change and Sustainable Tropical Agriculture（招待講演） |
| 4．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>藤本穣彦 |
| 2．発表標題<br>「農と食の地域自給圏」の感性評価手法――「日本で最も美しい村」由布市塚原地区(大 分県)の審査を事例として |
| 3．学会等名<br>第17回アジア太平洋カンファレンス；アジア太平洋におけるガバナンス：政治、経済、ビジネス、環境（招待講演） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>藤本 穣彦 |
| 2．発表標題<br>中山間地域の希望はどこに？ |
| 3．学会等名<br>浜松湖南高校1年生進路相談会（於：静岡県浜松市）（招待講演） |
| 4．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤本 穣彦 |
| ２．発表標題<br>「日本で最も美しい村」の成りたちと基本的考え方 |
| ３．学会等名<br>松崎町「日本で最も美しい村」学習会（於：静岡県松崎町）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤本 穣彦 |
| ２．発表標題<br>人口減少時代の農村資源計画--コミュニティ・エネルギーからのアプローチ |
| ３．学会等名<br>静岡県先進的農業推進協議会・平成30年度研究成果情報交換会（於：静岡市）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤本 穣彦 |
| ２．発表標題<br>最も美しい村をつくるとはどういうことか―コミュニティデザインの視点から |
| ３．学会等名<br>高校生アカデミックチャレンジ（於：静岡県藤枝市）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計5件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤本 穣彦 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>実生社 | ５．総ページ数<br>224 |
| ３．書名<br>まちづくりの思考力――暮らし方が変わればまちが変わる | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>『農業と経済』編集委員会、秋津元輝、池上甲一、久野秀二 編 | 4．発行年<br>2021年 |
| 2．出版社<br>英明企画編集 | 5．総ページ数<br>320 |
| 3．書名<br>季刊『農業と経済』2021年夏号 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>小川雄平・猿渡剛編 | 4．発行年<br>2020年 |
| 2．出版社<br>中央経済社 | 5．総ページ数<br>213 |
| 3．書名<br>国際ビジネス論を学ぶ | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>秋津 元輝・佐藤 洋一郎・竹之内 裕文編集、藤本 穣彦（分担執筆・第2章） | 4．発行年<br>2018年 |
| 2．出版社<br>昭和堂 | 5．総ページ数<br>310 |
| 3．書名<br>農と食の新しい倫理 | |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>国土総合研究機構観光まちづくり研究会、上田 裕之、小野崎 研郎、猪股 亮平、谷 彩音、三上 恒生、今場 雅規、林 明希人、今泉 ひかり、江花 典彦、奥川 良介、岡村 幸二、副田 俊吾、山田 泰司、植村 真雄、中嶋 紀世生、藤本 穣彦、荒 ひかり | 4．発行年<br>2022年 |
| 2．出版社<br>学芸出版社 | 5．総ページ数<br>250 |
| 3．書名<br>交流まちづくり | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

「五ヶ瀬町まちづくりの対話篇」 五ヶ瀬町自然エネルギー研究所 Youtubeチャンネル
https://www.youtube.com/watch?v=4reRl0qcLe8
「内橋克人氏を偲んで: 食とエネルギーの地域自給圏をつくる 」地産地消ネット福島
https://www.youtube.com/watch?v=2wwkDu21WAg
「生ごみリサイクル堆肥づくり，よかんど」 五ヶ瀬町くらら Youtubeチャンネル
https://www.youtube.com/watch?v=PHwJdRlYA5A&t=2234s
「協働とは？」 （パネリスト）トヨタ財団国際助成プログラム Youtubeチャンネル
https://www.youtube.com/watch?v=9r36_6tKNkA&t=1068s

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|